

1. 三木町と瀬越町

鹿 野 勝 彦

- I はじめに
- II 三木町と瀬越町
- III おわりに

I は じ め に

金沢大学文学部文化人類学研究室では、1996年度の調査実習を、石川県加賀市の三木地区三木町と大聖寺地区大聖寺^{せごえ}瀬越町の、2つの集落において実施した。本報告書は、この調査実習に参加したメンバーが分担執筆した報告によって構成されており、当研究室の調査実習報告書としては12冊目のものとなる。調査実習の目的、方法や、調査日程、報告書刊行の意図等は、従来からの方針を基本的には踏襲しており、また既刊報告書でものべているので、ここではくり返さない。¹⁾

ただ、1996年度には、1995年度に引き続いて、加賀市西北部の海岸に近い地区から、調査対象となる集落を選定したことが、当研究室の従来の調査と、やや異なっている。これは、1995年度における加賀市橋立地区の黒崎町、深田町を対象とした調査において、地区内の近接した集落の間に、予想していた以上に明確な個性の差が見られたことが、私達、調査実習を担当する教官（鹿野、鏡味、西川）の関心をひいたためである。もっとも調査実習に参加する学生、院生の大部分にとっては、調査そのものが初めての体験であり、かつ対象となる集落はもとより、加賀市一帯についても、調査活動を開始するまでは、ほとんどなじみのない地域であった。したがって、上述の集落の個性に対する関心も、必ずしも報告書の内容に具体的に反映されているわけではない。

また本報告書では、以下の各章の報告は、各々の執筆者の個別の興味、関心に基づいて執筆されているので、全体として対象集落についての網羅的な記述がなされているわけではない。そこで以下では、三木町と瀬越町の立地、行政上の位置づけ、人口と世帯、生業と生活などの変遷について、最少限の必要と思われる資料提示と記述を行うとともに、これら2つの集落の特徴について若干の感想を述べ、2章以下の各論への導入としておきたい。

II 三 木 町 と 瀬 越 町

石川県の西端に位置する加賀市の中でも、三木町と瀬越町はその西部にあって、加賀市の中心部をなす大聖寺の市街地から西流して日本海へ注ぐ、大聖寺川の下流部に立地している。

三木町は大聖寺川河口から3kmあまりさかのぼったあたりの左岸（南）に位置する集村状の集落で、背後（東と南）には標高100m前後の山地を背負い、前面（西と北）はひらけた平地で、

ほぼ水田となっている。背後の山地には1973（昭和48）年に開通した北陸自動車道が弧状に、三木町を囲むように走っていて、集落東南には加賀インターチェンジがある。また国道305号線は集落の北を大聖寺川沿いに伸びて北陸自動車道と交差しており、さらに集落の西には県道熊坂塩屋線が通っている。また、加賀市の中心部、大聖寺の市街地や、JR大聖寺駅までは、直線距離で3 kmたらずの位置にある。

一方、瀬越町は大聖寺川河口から1 km余りの右岸川岸に位置するやはり集村状の集落で、北側は松林と砂丘をへだてて、日本海に面している。西は塩屋町に近接しており、川をはさんで三木町へも県道熊坂塩屋線で、2 kmあまりで達することができる。また東西本願寺の別院がおかれている加賀市吉崎町は、大聖寺川対岸からわずかに西にあって、この吉崎町は福井県芦原町の吉崎町と北潟湖をはさんで、ほとんどつながっている。

三木、瀬越のいずれにせよ、自家用車の使用を前提とすれば、現状での道路事情には、比較的恵まれた立地にあるといつてよい。ただ公共交通機関としては、大聖寺駅前から三木、瀬越を経由して塩屋へ至るバス路線があるものの、便数はさほど多くない。

行政的には、三木町は、藩政期から1889（明治22）年までは単独の右村であり、1889年から1957（昭和32）年までは右、橘、奥谷、永井、熊坂の5村が合併して成立した三木村（のちに吉崎が編入）の村役場のおかれた大字（右）であったが、1958年から加賀市の成立にともない、加賀市に編入されて、現在の町名となった。旧三木村の5集落からなる区域は、現在も三木地区として一定のまとまりをもっており、この範囲を通学、通園区域とする三木小学校、三木保育所のほか、地区の集会所（三木地区会館）、JA加賀市三木支所といった、地区を単位とする公共施設が、三木町内におかれている。

一方、瀬越町は、三木町と同じく、1889年までは単独の瀬越村であったが、1889年に吉崎とともに瀬越村を形成、その2年後に吉崎が分離して三木村に編入されるにともない、また単独で1954年まで瀬越村として存続していた。その後、1954年大聖寺町と合併して大聖寺瀬越町となり、1958年加賀市に編入されて現在に至っている。ただ、瀬越町は地図からもあきらかなように、大聖寺の市街地からはかなり距離があり、むしろ隣接した塩屋町とのつながりが強い。小学校も、かつては瀬越、塩屋それぞれにあったが、1967（昭和42）年には統合して両町の境に緑丘小学校が設立され、これに隣接して緑丘保育所も設置されている。

しかし三木町にせよ、瀬越町にせよ、各々には独立した町会として、町会独自の組織と役員、町会の集会所（公民館）、町会住民を基本的には氏子とする神社などがあり、その他さまざまな、実質的には町会を単位とする活動、行事なども実施されている。また町会は、加賀市の行政の末端単位としても機能している。それらについては、次章以降で個別に扱われるので、ここでは詳述しないが、いずれの町も、空間的に比較的明確に識別可能な集落であるとともに、地域社会の中で現在も重要な役割、機能をもつ基本的な地縁的社会集団であることは、疑いない。

両町の世帯数、人口と1世帯あたりの平均人数の動態を、主に国勢調査の資料からまとめると、表-1のようになる。両町の人口動態についても、別に扱うのでここでは詳述しないが、とりわけ瀬越町については、1世帯あたりの平均人数が、この地域の集落としてはかなり少ないことが目をひく。²⁾ もっとも瀬越町においては数値自体の変動が激しく、その解釈にあたっても、背後の事情についての注意が必要なことを指摘しておく。

表-1 三木町、瀬越町の世帯数、人口、世帯人数（平均）

| 年 度 | 三 木 町 | | | 瀬 越 町 | | |
|-------------|-------|-----|------|-------|-----|------|
| | 世 帯 数 | 人 口 | 世帯人数 | 世 帯 数 | 人 口 | 世帯人数 |
| 1889 (明治22) | 133 | 646 | 4.86 | 201 | 964 | 4.80 |
| 1920 (大正9) | 94 | 429 | 4.56 | 124 | 348 | 2.81 |
| 1960 (昭和35) | 97 | 475 | 4.90 | 76 | 272 | 3.58 |
| 1965 (昭和40) | 95 | 468 | 4.93 | 70 | 229 | 3.27 |
| 1970 (昭和45) | 97 | 449 | 4.63 | 71 | 219 | 3.08 |
| 1975 (昭和50) | 101 | 436 | 4.32 | 70 | 231 | 3.30 |
| 1980 (昭和55) | 102 | 436 | 4.27 | 64 | 217 | 3.39 |
| 1985 (昭和60) | 107 | 445 | 4.16 | 61 | 207 | 3.39 |
| 1990 (平成2) | 104 | 416 | 4.00 | 56 | 187 | 3.34 |
| 1996 (平成8) | 116 | 440 | 3.79 | 55 | 191 | 3.47 |

資料出所 1889 『日本地名大辞典・石川県』

1920 三木町は『日本地名大辞典・石川県』瀬越町は『瀬越村村治一覧表』

1960～1990 国勢調査 1996 市役所資料

生業面から見ると三木町はもともと農村としての性格の強い集落であった。表-2は、三木町、瀬越町と、近隣の三木地区熊坂町、大聖寺上木町、それに1995年度に私達が調査を行った橋立地区の集落の中で、比較的農家の占める比率の高い深田、黒崎、高尾、及び瀬越との比較のために橋立、の各町の、農家についての主要な指標をまとめたものである。³⁾ この表からもあきらかなように、三木町は、農家が全世帯に占める比率こそ他の集落に比してそれほど高くないが、専業、1種兼業農家の占める比率が1970年に、なお全戸の半数以上を占めているという点で、かなり特異な存在であるといえる。すなわち、いわゆる高度経済成長期を経たこの時点では、かつての純農村的集落においても、農家の2種兼業化が進み、専業、1種兼業農家の比率が著しく低下しているのが一般的なのである。⁴⁾ もっとも、三木町においても、農家の2種兼業化は、1970年代半ばまでには、他の集落とほぼ同様に進行していったのだが、三木町における農業と農地への執着の強さは、集落の特徴の1つとして注目すべきであろう。

表-2 加賀市西北部諸集落の農家

| 集落名 | 年度 | 世帯数 (A) | 農家数 (B) | 農家率 (B/A×100) | 専・兼業農家数 | | | 基幹的農家率 (C+D/A×100) | 耕地面積 (ha) | |
|-----|------|------------|------------|------------------|---------|---------|------|-----------------------|-----------|------|
| | | | | | 専業(C) | 1種兼業(D) | 2種兼業 | | 田 | 畑 |
| 三木町 | 1960 | 97 | 79 | 81.4 | 7 | 53 | 19 | 61.9 | 77.2 | 13.3 |
| | 1970 | 97 | 71 | 73.2 | 4 | 46 | 21 | 51.5 | 76.0 | 5.8 |
| | 1980 | 102 | 56 | 54.9 | 1 | 7 | 48 | 7.8 | 58.0 | 3.9 |
| | 1990 | 104 | 38 | 36.5 | 1 | 2 | 35 | 2.9 | 61.3 | 2.2 |
| 瀬越町 | 1960 | 76 | 36 | 47.4 | 9 | 11 | 16 | 26.3 | 14.4 | 2.6 |
| | 1970 | 71 | 23 | 32.4 | 2 | 5 | 16 | 9.9 | 11.7 | 1.0 |
| | 1980 | 64 | N.A. | — | — | — | — | — | — | — |
| | 1990 | 56 | N.A. | — | — | — | — | — | — | — |
| 熊坂町 | 1960 | 100 | 89 | 89.0 | 25 | 28 | 36 | 53.0 | 66.2 | 3.8 |
| | 1970 | 115 | 73 | 63.5 | 2 | 21 | 50 | 20.0 | 52.4 | 1.9 |
| | 1980 | 124 | 51 | 43.2 | 0 | 3 | 48 | 2.4 | 36.5 | 0.3 |
| | 1990 | 124 | 37 | 29.8 | 0 | 4 | 33 | 3.2 | 34.9 | 0.9 |
| 上木町 | 1960 | 45 | 39 | 86.7 | 6 | 14 | 19 | 44.4 | 38.8 | 4.6 |
| | 1970 | 50 | 39 | 78.0 | 2 | 14 | 25 | 32.0 | 37.3 | 6.3 |
| | 1980 | 71 | 34 | 47.9 | 1 | 4 | 29 | 7.0 | 28.0 | 5.3 |
| | 1990 | 92 | 25 | 27.2 | 1 | 1 | 23 | 2.2 | 29.9 | 1.6 |
| 深田町 | 1960 | 49 | 44 | 89.8 | 15 | 7 | 22 | 44.9 | 16.1 | 1.2 |
| | 1970 | 49 | 44 | 89.8 | 2 | 11 | 31 | 26.5 | 24.6 | 2.1 |
| | 1980 | 50 | 33 | 66.0 | 0 | 1 | 32 | 2.0 | 19.7 | 2.9 |
| | 1990 | 54 | 25 | 46.3 | 2 | 0 | 23 | 3.7 | 21.0 | 0.5 |
| 黒崎町 | 1960 | 100 | 87 | 87.0 | 25 | 43 | 19 | 68.0 | 31.4 | 8.3 |
| | 1970 | 93 | 79 | 84.9 | 2 | 26 | 51 | 30.1 | 40.9 | 9.3 |
| | 1980 | 102 | 62 | 60.8 | 5 | 1 | 56 | 5.9 | 34.1 | 1.3 |
| | 1990 | 104 | 44 | 42.3 | 5 | 5 | 34 | 9.6 | 40.5 | 5.1 |
| 高尾町 | 1960 | 66 | 42 | 63.6 | 22 | 14 | 6 | 54.5 | 21.7 | 5.1 |
| | 1970 | 85 | 41 | 48.2 | 1 | 15 | 25 | 18.8 | 28.5 | 5.9 |
| | 1980 | 77 | 33 | 42.9 | 3 | 10 | 20 | 16.9 | 23.6 | 11.9 |
| | 1990 | 66 | 28 | 42.4 | 5 | 9 | 14 | 21.2 | 38.0 | 18.7 |
| 橋立町 | 1960 | 112 | 60 | 53.6 | 6 | 8 | 46 | 12.5 | 5.6 | 0 |
| | 1970 | 112 | 26 | 23.2 | 2 | 5 | 19 | 6.3 | 6.7 | 0.8 |
| | 1980 | 121 | 9 | 7.4 | 0 | 0 | 9 | 0 | 3.0 | 0 |
| | 1990 | 125 | 5 | 4.0 | 0 | 0 | 5 | 0 | 2.0 | 0 |

資料出所『世界農林業センサス農業集落カード』、『農業センサス農業集落カード』

ただし世帯数は国勢調査による

このことは、必ずしも三木町が近隣の諸集落に比べて、特別に農業を行ううえで立地に恵まれていたとか、あるいは農業以外に頼るべき生計の道がなかったということを意味していない。たしかに三木町では1戸あたりの平均水田面積は、周辺の他の集落に比べるとやや大きい、決定的な違いというほどではないし、他方で三木町からは大聖寺の市街地は徒歩でも通勤可能な距離にあって、事実、早くより男性は役場勤務、教員などの公務員の他、大聖寺駅に近接する大同工業をはじめとする諸企業への、又、女性は大聖寺の繊維関連企業への通勤者が多かった。その反面、自営的な副業に従事する者は、三木では比較的少なかったともいわれる。農業を中心に据えながら通勤賃労働にも従事するという、手がたい世帯経営を近年まで維持してきた三木町住民の気風は、農業そのものからの収入が、若干の商品作物栽培に特化した企業的專業農家以外の大部分の世帯において、直接的にはさほど大きな意味をもたなくなった今日でも、なおある程度うけつがれている。そのことは、例えば住民の転出が今日の若年層においても著しく少ないこと⁵⁾のほか、11章で詳述される農産物の品評会をはじめとする、さまざまな地区組織や行事などのありかたのなかにも、ある程度垣間みることができるように思われる。

これに対して瀬越町では、三木町と対照的に、もともと農村的性格は稀薄である。もっとも食糧難の第2次大戦中から戦後しばらくにかけては、瀬越でも多くの世帯が農業に従事しており、1960年にはなお全戸の2分の1弱、1970年にも3分の1弱の世帯が農家であり、專業、1種兼業農家も若干は存在していたのだが、1975年以降は農家数が4戸以下となっている。⁶⁾ここでは三木町と反対に、農業や農地に対する執着は、全体として比較的弱かったといえよう。第2次大戦前には、漁業、養鶏業、養蚕業なども一定の重要性をもっていたとされるが、それらも瀬越町の基幹的生業というほどの重要性はもたなかった。

瀬越町は、かつて、西に隣接する塩屋や、東へ8kmほどの位置にある橋立とともに、いわゆる北前船の有力な船主や多くの船員を輩出した集落として知られている。もっとも北前船による回船業自体は、今世紀初頭以降衰退の一途をたどるが、瀬越出身の若干の船主一族（^{ひろろ}広海家、^{おおいえ}大家家など）は、海運業、保険業などで成功をおさめ、主に関西地方を本拠としつつ、北海道、当時日本領であった樺太などへ事業を展開していった。これらの一族は、特に1950年前後まで瀬越村とその住民に財政的な支援を行うとともに、各地に所在する事業所で瀬越出身者を雇用するなど、さまざまな形で瀬越とつながりをもっていた。こういったつながりを通じて、瀬越村は村内部にはこれといった産業をもたなかったにもかかわらず、地域でも橋立などとともに豊かな村として知られ、また住民も一般に周辺の農村的村落と比べて、高い生活水準を維持してきたといわれる。しかしその一方で、世帯数は19世紀末から20世紀前半にかけて甚しく減少しており、かつ他の集落に比べ世帯規模が早くから比較的小さかったこと、すなわち若年層の流出が著しかったことが目をひく。北陸の、とりわけ農業立地面ではあまり恵まれない集落からは、多くの若年層の人々が、短期、長期の出稼ぎや、恒久的な移住、転出を行ってきたのは周知のことであり、その要因、

動機や実態も、地域や時期等によって相当に多様、複雑であることは、筆者自身もすでに指摘したことがあるが⁷⁾、瀬越の場合、集落出身者の経営する企業の関西や北海道などにおける存在が、集落住民の職業選択や移住のありかたに、直接、間接、さまざまな形で影響したと考えられる。ただ、こういったつながりも、第2次大戦後しばらくして急速に弱まった。その一方で、道路整備等もあって、近年ではかなりの数の転入者もみられるようになり、瀬越は大聖寺市街地に対する郊外住宅地としての性格を強めてきた。住民の一部には、かつての北前船主の里としての性格を前面に出して、いわゆる活性化を企てる動きもあるが、現状ではそれはなお、集落全体の合意にはなっていないようにみえる。この経過については、18、19章で詳しく検討される。

Ⅲ お わ り に

三木町にせよ瀬越町にせよ、現在では大部分の住民の生計は、主として大聖寺の市街地やその周辺への通勤賃労働によって支えられており、そこでの住民の日常生活のスタイルにおいても、とりたてて特徴はないようにみえる。しかし、両町を含む、現在の加賀市西北部（橋立、三木、塩屋の各地区や大聖寺地区の西部）の海岸沿いの一帯に散在する諸集落は、もともと相互に近接していながら立地条件も相当に異なり、またそれらの集落やその住民が生活を維持し、発展させるためにとってきた戦略もそれぞれに異なっていた。それらのなかには瀬越の例のように、特定の一族ないし個人の存在が、集落やその多くの住民のありかたに大きな影響を及ぼした場合も見られる。私達が注目した集落の個性とは、このような条件とそれに対する住民の主体的対応の結果として、歴史的に形成されてきたものであろう。1960年代以降の変化の過程で、そういった個性は表面的には失なわれつつあるが、住民の意識の中には、部分的にせよなお根強く残っているし、そうである以上、それは今後、集落が変貌を遂げてゆく際に、その方向を規定してゆく1つの要因として作用するはずである。

本報告書も、実地調査を初めて経験する学部3年生を主対象として行う調査実習の報告という制約と限界の下で作成された。そのため、記述も分析も、多くの点で不正確、不十分なものにならないをえなかったと思われる。関係者各位の忌憚のないご批判、ご叱正をお願いする次第である。

注

- 1) これまでに刊行した報告書の一覧は巻末の参考文献一覧に、調査日程と参加者とはやはり巻末の「おわりに」の項に記してある。
- 2) 瀬越と三木との比較のみでなく、橋立地区の8つの集落の同様の数値と比較しても、瀬越の世帯平均人数の少なさはあきらかである（『加賀市橋立地区、黒崎町と深田町』、1章の表-1参照）。橋立地区においても、一般に農村的集落においては世帯平均人数は大きく、4人以下という数値を安定して示すの

は、橋立のみである。

- 3) 橋立地区の全集落についての同様の資料は、『加賀市橋立地区、黒崎町と深田町』の1章、表-2にまとめられている。
- 4) この点は、私達が調査を行ってきた石川県内の農村的集落全般についても、ほぼいえることである。ただ、1980年代以降においては、センサス上で専業農家とされている農家の少なからぬ部分は、もともとは兼業農家であったものが、兼業的農業従事者の高齢化による就業先の退職にともない、専業化したという事例が少くない。表-2で仮に「基幹的農家」とした専業農家にも、そのような農家がある程度含まれている点は、注意を要するが、おおよその傾向は把握しうるであろう。
- 5) 6章表-2に見るように、三木出身者の町への残留率は、少子化にともない、特に男性においては、むしろ近年の方が高くなっている。おそらく三木においては、出生する男子の大部分が跡とりと目される長男になったことにより、このような結果を生じたとみられるが、その一方で7章表-3、4に見るように、少なくとも現在は跡とりと目される世代が存在しない高齢者世帯の比率も高く、慎重な検討を要する。
- 6) 本稿で集落の農、林業等に関する統計は、基本的に『世界農林業センサス農業集落カード』、『農業センサス農業集落カード』に依拠しているが、農家数が4戸以下の農業集落のカードは、プライバシー保護の観点から閲覧できない。
- 7) 『集落の過疎化過程・現状と展望』、8-9を参照。